

学術団体名：一般社団法人日本育種学会
 学術刊行物の名称：Breeding Science
 事業期間：平成29（2017）年度～令和3（2021）年度

1 取組の概要

1. 取組内容の特徴と目的、意義及び方法

本取組では、Breeding Science の国際的な地位の安定化を図り、日本を含むアジア地域から良質な育種学情報を効果的かつ継続的に国際発信するための体制を構築することを目的とする。

2. 応募時に設定した取組の目標・評価指標

- (1) 魅力ある総説を掲載するため、国際発信性のある企画を充実させる。
- (2) 外国人編集委員数の割合を30%に増やし、編集体制を国際化する。
- (3) 外国人レフェリー数の割合を30%に増やし、査読体制を国際化する。
- (4) 早期公開化（オンラインファースト）を効果的に継続運用する。
- (5) 広報活動を強化して、全論文投稿数を年200報、このうち海外からの投稿数を年130報以上、掲載論文へのアクセス数やPDFのダウンロード数を24万件以上、結果として5年-IF値での2.0の達成を目指す。

2 目標の達成状況

1. 現在までの目標の達成状況

- (1) 2017年4月、2018年4月に特集号を発刊した。海外を含む著名な研究者を含む最先端のレビューを2018年8月、2019年7月に掲載した。
- (2) 著名な外国人を編集委員として増員した。その結果、4人増の13人となった。ただし、IFの上昇に伴い、投稿数が急激に増加し、国内の編集委員の負担が大きくなったため、国内編集委員を増員したため、比率としては3%増の26%のやや微増となっている（図1）。
- (3) 外国人レフェリーの登録数は毎年200名以上であるが、審査に関わった割合は30%を達成できていない。
- (4) 継続的に投稿料の見直しを行い、これまで四半期毎であった早期公開を1～2ヶ月毎に変更し、よりタイムリーな情報発信が可能となった。
- (5) メール配信、ホームページ改訂等により国際的な広報活動を強化したこと、インパクトファクターが2に近づいたことから、海外からの投稿が大幅に増加し、2018年の総投稿数は目標値を大きく上回る245報に達した（図2）。掲載論文へのアクセス数とPDFのダウンロード数はそれぞれ約43万件および約13万件を突破した（図3）。2018年度のインパクトファクターは1.743、5-Year インパクトファクターは2.185となり、目標を超過達成した（図4）。

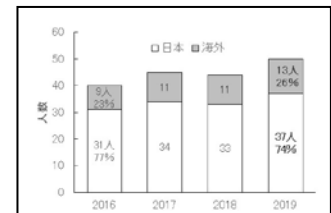


図1 外国人編集委員の比率

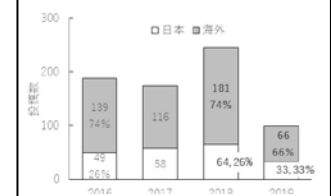


図2 全論文投稿数に対する海外からの投稿数

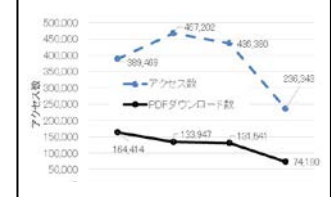


図3 掲載論文へのアクセス数、PDFのダウンロード数

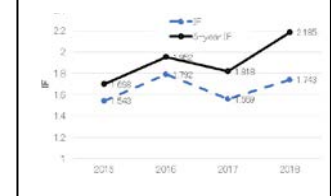


図4 IFの変化

2. 今後の計画

- (1) 2020年度および2021年度に発行予定の特集号でも、国際的に著名な研究者に執筆を依頼している。レビューの企画については、2019年度および2020年度はそれぞれ1報の掲載を予定しており、それ以降についても注目されている最先端の研究テーマのレビューの依頼を継続する。
- (2) 海外からの投稿が増加し、対象作物も多様化しているため、これらに対応可能な外国人研究者を編集委員として招聘し、外国人の割合を30%以上に引き上げる。
- (3) レフェリーとして海外の研究者率を増加するようにエディターの注意喚起に努める。
- (4) 長期的にも自立可能な早期公開システムの確立をめざし、著者の自己負担のもとで運用できるよう、投稿料の見直しを継続的に実施する。
- (5) 海外からの投稿を含む総投稿数は200報以上を達成しているため、広報活動や魅力的なレビュー等の掲載により、今後は投稿数のみならず、掲載論文の科学的水準についても維持に務める。